

2021年のアナログテレビ放送局

テレビ放送が地上デジタル波主体となり、アナログ電波が停波したのは、2011年 7月 24日。暫くの間、CATV では、アナログ波に変換送信していたが、いつの間にかそれもなくなった。古い機械類の動態保存を活動の一端とする 工房 Nishi には、アナログテレビの名機が何台か生き延びているが、テレビゲームの RGB 出力端子以外、試験する手段がなくなってしまった。しかし、「蛇の道は蛇」。



テレビはソニーの初代インハウスデザイナー、山本孝造氏のデザインに成る名品、ソニーの 5インチ「マイクロテレビ」、5-303型。1962年の発売時 65,000円という価格は、裕福な家の高級おもちゃだった。

私が実見したのは高校 2年の 1964年、東京オリンピックの年。藤沢を通過する聖火リレーに学校から伴走者が選ばれ、全校生徒が沿道で声援を送った。サッカーの試合が見たくてたまらない Y 君、家のマイクロテレビを学校に持って来て、授業中、机の下で膝に挟んだテレビを見ているのには呆れた。トランジスタラジオをイヤホンで聞いていた輩は何人か居たが、流石にテレビは彼だけ。バレなかったのか、先生に怒られたという話は聞かない。昔から定員枠を定めない男女共学の公立校、校則のないことは指摘されないと誰も気づかない、というリベラルな校風だった。

映し出しているのは、コロナ禍で 1年延期のオリンピック 2020+1。7月 26日に横浜球場で行われた女子ソフトボールの日本対アメリカ、決勝戦の入場行進。結果はご存知の通り、日本が勝つことになる。



右は我が家の 32インチ液晶テレビ。そろそろ 4K テレビに買い換えた方が良くご老体だが、32インチなどという小さなサイズは売っていない。別に 4K が見たい訳ではないけれど、オーディオの方が大切な我が家、これ以上大きなものは、6畳の部屋には入らない。左上が同じ画面をモノクロで映すソニー。どうして、半世紀前のテレビと一緒に映るのか？手前に V字型に見える角状アンテナがヒント。デジタル画像をアナログに戻して、電波で飛ばしているのである。

数日前に昔の PC のメールを整理していて気づいたのは、前述の山本孝造氏の命日が 7月 26日であること。25日の対カナダ戦では、外部アンテナ端子へのインピーダンス整合ケーブルを準備してトライしたものの、結果は今一つ、というところで終わっていた。

明けて 26日、今日成功しなかったら来年はない。外部アンテナ端子の道は諦め、微弱電波を送ることにする。この距離だと映るが、隣の部屋だと映らない微弱電界強度。

山本孝造氏とはソニー歴史資料館で偶然お会いしたのをキッカケに、ご自宅まで参上して色々ご教示を賜り、一応は几帳面な積りの私が逆立ちしても敵わない、正に一級の一次資料集を頂戴しているのだ。



最後にお会いしたのは、メールで繋がっている娘さん曰く、2011年の夏、当方は娘婿が一緒だった。「こんなに元気潑刺な父の姿、久々に見ました。」似たような年廻りの我が家の娘でも言いそうなこと、今も忘れない。



こちらは 2020年冬のテスト風景。基本的な機器構成は今回のテストと同じだが、使っているテレビが、1966年の三菱電機製、6インチ。

畳の上の平べったい装置が、昔、マンションの共聴システムを各戸に配信していた時代のデジタル⇒アナログコンバータ。以前、同じ会社で机を並べたことのある友人の実家が田舎のテレビ屋さんで、育ちは所謂「ラジオ少年」。CATV 会社に機器を納めていた会社の先代社長から今風の IT 会社に変身するべく事業を引き継いだ現職。産業廃棄物寸前の山から 1台取り置いて下さったコンバーターが我が家に終の住処を得た。手品の種明かしはこれまで。

7月 25日には完全な成功に至らなかったテスト、孝造氏の命日、26日に成功したのは、実験環境が全く同じではないことは先に述べた。アナログテレビとの接続に関しては、外部アンテナ端子ではなく、VHF 帯の2チャンネルで微弱電波を送っている点、今回のソニーと、前回の三菱が同じ条件。と言うことは、頭の固い先生なら、外部アンテナ端子のインピーダンスマッチングの追加実験が必要、と言われるだろう。夏冬で放熱特性が違うことも無視できない気配だが、いずれにせよ、私は論文を書いている訳ではない。

何が成功の因子だったのか、それは読者の判断に委ねよう。

神の思し召し、とか、どれだけ微弱な電波でも天国には届いてしまう、とか、とか、思いはどこまでも届く、とか、最後まで諦めたらあかん、とか …。多分、正解は一つではなさそうな気がする。

(初出 Feb. 15, 2020)

(改稿 July 29, 2021)

工房Nishi 所蔵 ビンテージマイクロテレビ一覽



写真、左から順に、ソニー、日立、三菱、松下。いずれもモノクロ。

- ソニー「マイクロテレビ」5-303型 5インチ、1962年、65,000円。
2021年春、修理の専門家、手塚則義氏に点検を依頼、致命的欠陥はないことを確認済み。画像、音声共に OK。
- 日立製作所 FI-5000 5インチ、発売年不詳、静態保存。
AC 電源を背中に背負わせる形で取り外し可能にしたのが唯一のアイデア、何も冒険しないところが実に日立らしい。
- 三菱電機 6P-126 6インチ、1966年、販売価格不詳。
動態テスト、2019年（画像、音声共に OK）
- 松下電器 9インチ 発売年不詳。
静態保存（電源コード欠品で入手のため、動作未確認）

この他、シャープのラテカセ（テレビ付きラジオカセット）「リンクスマイクロ」も、2019年の動態テスト、OK（画像、音声共）。

（初出 Jan. 7, 2020）

（補訂 July 29, 2021）

後発メーカーの参入状況



1964年から翌年にかけてアメリカ、ニューヨークで開催された万国博覧会には、日本館が建設され、官民総力をあげて戦後復興した日本を宣伝している。「フジヤマ、ゲイシャ、ウタマロ」から、工業立国へのイメージ切替えの努力は涙ぐましい程。所謂、高度経済成長の始まりだった。

国鉄は試験運転中の新幹線テスト車両を2編成繋いで、富士山に見える場所に停めた写真を公式パンフレットの印刷に間に合わせている。私は父の同級生が国鉄にいたのでその公開試乗切符を手に入れてくれて、大喜びで乗りに行ったスナップ写真が残る。

三菱電機はアメリカを追う家電品ではインパクトがないのが明白なので、トランジスター化の目玉に「マイクロテレビ」を出品。ブラウン管以外の面積比率を最小限に抑えるために正面から追い出されたチャンネルセレクターなどの操作部が使い勝手を損ねてはいない秀逸なデザイン。海外マーケットには SINGER ブランドで供給された。

世界最小を謳うキャプション、厳密には、「直視型 6インチブラウン管搭載機種の中では …」と言うのが正しいが、1962年に先行したソニーがクレームをつけた気配がないのは、同じような誇張は身に覚えがあったの

か、或いはいち早くニューヨークに自前のショールームを開設して市場先行した余裕からだったのかも知れない。



(5-303型 販売店向けのチラシ 1962年)

[CM、若しくは余談]



ガッツポーズは北島選手。(大事ことは細かい字で記す、と言う嫌な時代、写真欄外の注意書きを見落とさないこと。)

(初出 Mar. 1, 2020)

(補足 July 31, 2021)